

白山麓吉野谷村の小地名の採集について

千葉 徳 爾*

1

石川県では、字以下の小地名を地租改正時にすべて甲乙丙丁とかイロハニなどという符号的な名称にかえてしまった。このために、公的な記録の上では字、小字そのほかの小さい場所に付けられた地名は、住民の記憶以外にはこれを求め得なくなったので、古来その土地に関して住民が働きかけ、あるいは記念としていた歴史の手がかりとしての地名は、ほとんど失われようとしている。ことに、太平洋戦争以前には水田農業がこの地方の住民の生活の基礎であったから、公的な記録の上には残っていないなくても、住民は常にその名称を使用し、子孫にも教え伝えてきた。必要性が大きかったわけである。ところが、近ごろは水田の重要性が失われたばかりでなく、これに付属して採草・採薪上重要度の高かった山林原野も、利用度が大きく低下してしまったので、その地名を使用する頻度も、きわめて稀になったわけである。そこで、いまこれを記録しておかないと、永久に忘れ去られるものが少くないと思われる。これは、石川県内全域に通ずる必要であるが、白山麓においてはその上に、かような小地名によってその土地に加えられた住民の活動が何であったかが、ある程度までうかがわれると考えられる。ことに、この地域では焼畑への出作りが盛んであったから、文書記録に保存されないその時期・利用程度・作物などが、ある程度まで地名からよみとれる可能性がある。したがって、この調査の第一の目的はまずこれを明らかにすることにある。

さらに一般的な関心として、地形や距離が土地の利用状態とどのようにかかわるのかを明らかにしようとする。これが第二の目的といえるであろうが、それは単に一、二の町村の範囲のみからでは不十分であるから、その完成は遠い将来に期さねばなるまい。

2

吉野谷村役場で調成された1万分1地形図に、各集落の住民で土地の形勢や地名に明るい者数名に依頼し、その記憶する小地名とその由来、伝承その他について教示を得、これを地図上に記入した。

そのさいに、地名については地域地名であるか地点名であるか、その厳密な境界はどこにあるか、広がりや概略はどうかなどは一切区別しなかった。これは人によって正確さが異なるし、また、正確さを求めるには時間をかけねばならず、知っている人を求めがたくなるおそれもあったからである。したがって、あくまで完成されたものとしてではなく、この図をもととして、将来にわたって補訂してゆくべき基礎的資料となることを期した。

地名は住民の呼称をもととし、むやみに漢字をあてることをしなかった。しかし、住民がその意味を述べ、漢字を示したものについてはこれを参考とした場合もある。たとえば、グンドムネと呼ぶが、この地方でグンドは葡萄、ムネは峯のことで、山ぶどうが多いからの名と説明された場合、これ

* 愛知大学文学部

を葡萄峯と記したというのがそれに当る。

このような地方的呼称として注意されるものに、ノマがある。ノマは小さい谷のことで、ヨシノマ、曲りノマ、クサノマなどがそれである。しかし、これらと太郎兵衛谷、センノウ谷、スギ谷などの谷のついた地形とは、どのような差違が認められるのかは、明らかにしえない。

カベは岩壁、ショウズは湧水、ヒラは山腹斜面、ホケまたはホーケは絶壁を伝う道のことで、いずれも地形名であり、きわめて原始的な利用を示すものといえよう。クラも岩壁であるがカベとどのようにちがうのか、明らかではない。そのほか断崖をあらわすものにマブという語も用いられる。しかし、地形名のすべてが地名となっているわけではないので、その調査は改めて別の方法をとるべきであろう。

3

地名の分布状態については、つぎのような点が注意される。

- 1) 地名の密度は、居住地とその周辺部とに多い。
- 2) 地名の占有範囲も、居住地域では1つの地名によって示される区域が狭く、それから遠ざかるにつれて広がる。
- 3) 地名の性質からみて、農耕・信仰・建築・交通などに関する地名は低地に、植物・地形などに関する地名は高地に分布する。
- 4) 山間部では水筋についての地名、すなわち谷・沢についての地名が多く、ついで山腹斜面に関する地名がみられ、山頂に付けられた地名は稀である。ことに奥地では、まず谷に地名が存して、つぎにその奥の山頂が谷によって命名される場合が少なくない。

これらの特徴について、簡単に説明を加え問題点を指摘しておく。

1) の地名密度が居住地域に多いことは、そこでの土地利用度が高く、土地が細分されてそのおのおの異なる利用および所有がなされているためである。

ことに、集落については、土地区画についての命名と、別に集落社会としての地域集団に対する呼称とがあって、両者は区別されねばならず、住民はこれを並用しかつ重複して呼んでいる。すなわち、一般に吉野谷の各集落では、オモテ・ウラという呼び方で家屋集団を区画し、これらが近隣組織の単位となる。瀬波地区ではそれぞれヒガシデ・ナカノテ・ニシデという3区域があり、その中間に防火のため家を建てることを申合せで禁じているキリヤシキという帯状の部分がある。しかしそれらは地名ではなく、三枚田・清水平などという地名が別に存在する。同じように、下木滑も地名は北垣内・中村・石戸などであるが、地域社会の組織としてはオモテとウラとの2組である。

2) 地名の占有範囲が広狭をもつのは、居住地域で前述のように土地の細分がおこなわれるという事実のほかに、農耕による利用がこまかい土地の起伏に対応して変化し、段丘・崖錐・崖面などの小起伏によって地域が区画され、そのおのおの別個の地名が付けられる結果でもある。たとえば上木滑地区では、もつとも上位の山間に、トチ谷・三粒谷の溪谷部があり、その出口の山脚にショゴジョ（成願寺の訛だという）、鐘堂、御釜などの地名がある。昔、山が崩れて寺が埋り、その釜が残ったからと説明されている。その下の、最上段の段丘が釜根、中段に下林・館・南手などの字が並び、さらにその下の幅のせまい最下段丘にコゴロ・馬落し・西畑などの地名が並ぶ。したがって、1つの地名の占有範囲は100m四方から150m四方程度しかない。

ところが、トチ谷・三粒谷はそれぞれ長さ約1km、幅も300~500mであるから、平坦部に比べて数十倍の地積となる。さらに高倉山をこえて東側の瀬波川流域に入ると、山が高くなり山腹斜面が長

くなるから、谷の長さも長く、幅も広がって、1つの地名が1つの谷の流域を占めるようになると、その面積は1～3km²にも達する。いうまでもなく、あまりに大きい谷では支谷にそれぞれの地名が与えられるほか、谷の入口と奥の名称もちがうし、奥の山腹や山頂にも別の名が与えられるから、一つの地名の拡がりには際限なく拡大してゆくことはありえない。しかし、居住地域に近い山間では、小さい谷でも支谷ごとに名を異にし、また、山腹・山稜にも別の名があるから、やはり全体として同じ型の地名分布が細密であるといえるのである。

3)の地名の性質についての差異は、当然ながらいちじるしいものがあり、概念的には本図を参照されれば一目瞭然であろう。ここでは中宮を例として説明してみよう。

中宮はもともと信仰によって占居された集落であるので、医王、四十九坊、宮ノ下など現在の集落付近には信仰に伴う施設に関連する地名が多い。やや高所である居住地の縁辺では、高畑、タンノコバ(コバは焼畑地あるいは畑)、五十山など、さらに登るとジャキリ(ジャは蛇抜けすなわち崩落跡地を示すらしい)、ジャオー(蛇尾)、江口小屋場(焼畑作りの小屋のあるところ)などの利用名称がみられる。善兵衛アラシなども所有者あるいは利用者に関するものである。

これらの地名の中で、特に注目されるのは山腹斜面に与えられる小屋場、切、アラシなどの名である。正確ではないがその場所は地形的に緩斜面に当たっており、それらの位置によって焼畑がひらかれ、出作り耕作がおこなわれたと判断される可能性が大きい。白峯地方の出作りは海拔高度として、約800mまでとされているが、この地区でも山腹斜面の地名は、やはりそれ以下に密である。ことに、吉野谷に面する低い山地では、市原付近に棒作り(或いは坊作りか)[750m]、ムサ作り[400m]などの緩斜面がみられ、木滑新の七兵衛、勘右衛門[670m]なども、地形からみて耕作者の名からとった出作地のように思われる。

古くはこの地方にも山の神信仰が顕著であり、居住地域と山間部との境には山の神がまつられて、それより奥は他界と考えられ、耕地をひらいたり、居住したりすることはつづまれたもののようである。瀬波川流域ではエイ谷との合流点に山の神がまつられ、それより下流と上流とで地名分布に明らかながい認められる。すなわち、ここより下流では地名が密で、居住地や耕地があつたらしく、三ツ屋、三ツ屋向、ホウソ、清水平、三枚田などの名がみられるが、山の神をまつる宮林をすぎると、ほとんど谷の名称や淵の名だけになり、密度もいちじるしく減ずる。しかし、これは谷底部の利用についてであって、山頂・山腹については、おそらく尾根筋を通ずる別の経路で利用がなされたと考えられ、必ずしも谷筋の山の神の位置で利用が変化するとはみとめられない。しかしながら、この点については資料不足であるので、広く調査をしてゆくにつれ、新しい発見が加わるであろう。

奥地の山や谷については、国有林内であるため住民の認識が現在では充分とは思われず、僅かに登山道にそっての道路の名称、坂とか施設についての地名が採集されたにすぎない。この点は、将来国有林内の地名を営林署資料から明らかにしてゆくつもりである。